



国際情報

新潟国際情報大学広報 第24号

(本校) ☎950-2292 新潟市みずき野3丁目1番1号 tel 025-239-3111 fax 025-239-3690 E-mail somu@nuis.ac.jp URL http://www.nuis.ac.jp/
(新潟中央キャンパス) ☎951-8068 新潟市上大川前通七番町1169番 tel 025-227-7111 fax 025-227-7117

時代の変化と教育内容の深化

社会の情報化を先導するために

高木 義和 (情報システム学科長・教授)

インターネットの普及に代表される情報化の波が一般家庭にまで押し寄せ、情報システム学科の設立時と比べると情報を取り巻く社会環境が大きく変化しています。高等学校で情報授業が始まり、本学の新生入学生の情報処理能力も格段に高くなることが想定されます。開学当初は先進的であった情報システム学科のカリキュラムですが、このような変化に対応し従来通り社会の情報化を先導できるようカリキュラムの改訂を行います。基礎、共通、専門科目の枠組みや授業科目を5系列から構成するといった基本的な枠組みは踏襲しますが、カリキュラムの先進性を担保するため JABEE 認定プログラムの導入、情報処理演習の多様化、基礎共通科目の前倒しなどの改訂を行います。

JABEE 認定プログラムは、情報システム学科の教育目標や教育内容が、情報システム技術者教育の国際的な教育水準を満たしていることを認定する制度です。プログラムを終了した卒業生には技術職に就くために必要な教育を受けたことを証明する認定書が交付されます。1999年に設立された日本技術者教育認定機構(JABEE)が情報システムを含む多くの技術教育の分野について審査を行っています。情報システム学科では2002年に既に試行審査を行っており2006年に本審査を予定しています。入学案内に記載のある2003年度入学生から対象となります。対象学生が3年

次になると JABEE 登録をし、登録した学生が規定の授業科目について規定以上の評価を得ることができれば JABEE プログラム認定書が交付されます。認定書により国際的な教育水準を満たした情報システムの技術教育を受けたことが保証されることとなります。情報システムの認定校は全国でも限られており学生の卒業後に有益となる制度といえます。

一方、情報処理演習ではますます大きくなる入学時の情報処理能力の格差に対応すべく一律の演習形式を改めました。従来一律に習熟度を上げるように配置されていた基本アプリケーション、エンドユーザプログラミング、プログラミング、プログラミング上級の各演習を同時に開講することになりました。さらにウェブ・オンライン演習を加えた5つの情報処理演習を1年次から2年次の間に自由に選択できるようにしたことから、個人の習熟度や興味に合わせた幅広いニーズに対応できるようになりました。また、情報システム関連の基礎科目、演習科目では系列毎に大切な2教科を必須科目とし2年次までに履修することになりました。これにより2学年までに情報システムを理解するために必要な知識を得ることができ、学生が自己の系列や学びたい専門分野を早い段階で決めることが容易になりました。就職活動時期の早期化・長期化に対応するためにも非常に重要な変更点です。

国際化教育を先導するために

広瀬 貞三 (情報文化学科長・教授)

今回のカリキュラム(新カリ)改正は、1994年開学時のカリキュラム(旧カリ)、2000年の新カリキュラム(新カリ)に続く、3回目のものである。時代の変化は烈しい。教えるべき内容は短期間に陳腐化し、重要と思われる問題自体も激変する。今回の改正は、この間、情報文化学科が進めてきた国際化教育をさらに深化させたものである。教育の内容、就職の実態、地域社会からの要望などを検討し、大きな修正をおこなった。その特徴は、次の5点である。

第二に、CEPの強化である。これまでと同様にCEP1:2は1年次必修だが、それ以降は「Advanced CEP」を専門科目として置き、2~4年次生がいずれも受講できるようにした。また、これはシステム学科の学生も受講できる。第一に、地域言語も手直しを行った。まず、言語の名称を「英語」から「アメリカ英語」とした。さらに、これまで留学に行かない学生は外国語が4年次後期まで必修だったものを、4年次前期は選択制にした。第三に、派遣留学制度である。アメリカコースを他のコース同様に、4ヶ月コースに変更した。これまでに比べて経費は増えるが、英語の習得を希望する学生にとっては朗報である。

第四に、全体の調整を行い、講義科目の見直しを行った。一部の科目は名称を変更した(「現代の経済」→「経済学(マクロ)」、「現代社会と福祉」→「福祉社会論」など)。また、一部の科目は廃止し(「エスニ・テイ論」)、「多国籍企業論」など、その代わりに新設科目(「現代イスラーム論」、「財政学」、「市民社会論」など)を加わえた。第五に、「インターンシップ」を単位化し、「キャリア開発関連科目」(仮称)を新設する予定である。

情報文化学科では、カリキュラムの内容を正確に反映し、大学年にある「国際」をもちこんだ学科名称への変更を視野に入れている。本学の国際化をさらに推し進め、魅力ある教育内容により、国際社会で活動する人材を輩出していきたい。



北京師範大学教員本学来訪

區 建英 (国際交流委員長・情報文化学科 教授)

5月9日(日)から14日(金)まで、提携校の北京師範大学より、楊共榮教授(歴史学部部長)と丁芳雲助教(対外漢語教育学院および歴史学部)が本学を訪問した。昨年度、新型肺炎への懸念により中断されていた北京師範大学への派遣留学を再開するのにもない、その受け入れ体制について協議し、あわせて今後の学術交流に関して意見交換するのがその目的であった。短い訪問期間ながら、両先生には学生向けの授業や教員向けの研究報告なども行っていた。

楊共榮教授はまず学生に向けて「中国の改革開放と教育の国際化」という題で公開講座を行い、1978年改革開放以来の中国社会の変化、個人の価値や能力を重視する新しい観念、教育の国際化へ取り組む中国の人々の意欲と二十数年の努力の成果などについて語った。約150名の学生が出席し熱心に聴講していた。また本学教員との研究会では、「古代中国とローマの交流」をテーマに報告していただいた。楊先生は、古代ローマ史、中国と外国の古代交流史を研究分野とされている。古代ローマに関する研究書は国の学術賞を得ており、中国世界上古史・中古史学会副理事長の要職にもある。今回の研究報告で楊先生は、紀元1000年頃に行われていた西のローマ帝国と東の漢帝国の東西交流を主題に、古代の人々が運々困難な路を乗り越え経済や文化の交流をなしてきてきたその大いなる努力と挑戦について語り、文明の発展における交流の重要性を強調されていた。報告の学術的な質の高さと専門外の研究者にもよく理解できるその平易さは、本学の教員たちに深い感銘を与えた。

丁芳雲助教は対外漢語教育の専門家であり、かつてロンドン大学の客員教授、愛媛大学の客員教授として招聘された経験をもつ。北京師範大学では二十数年にわたって外国人留学生の漢語教育にたずさわり、各国の留学生に敬愛されてきた。今回の訪問では、2・3年次の学生に向けてそれぞれのレベルに合わせて「中国語の文法活用と会話」について授業を行った。丁先生は豊かな言語教育経験を生かして、軽やかに文法とその活用を学生に身に付けさせ、身振りなども用いて学生とコミュニケーションをはかり、いずれの教室も笑顔と活発な雰囲気は満ち溢れていた。

訪問の最終日は新潟地域の見学であった。一昨年北京師範大学に留学した本学学生の通訳と案内により、新潟歴史博物館(みなとびや)、旧新潟税関、朱鷺メッセ、ビッグスワン、新発田市清水園、東新潟火力発電所などを訪れた。両先生は新潟歴史博物館を参観した際、地域史料の保護と整理に対する新潟市民の努力に感心し、また東新潟火力発電所にも深い興味を示しておられた。訪問期間中には、本学の派遣留学プログラムにより北京師範大学に留学した在学生や卒業生たちが、ほぼ毎晩にわたってホテルまで両先生を訪ねていた。最終日の夜は、こうした留学経験者たちがみずから晩餐会を主催して両先生を囲み、留学の思い出や最近の日中交流などについて、熱心に語り合っていた。



国際交流フェア、開催される

長坂 格 (国際交流委員・情報文化学科 講師)

4月19日から5月18日までの期間、本校と新潟中央キャンパスにて国際交流フェアが開催されました。海外の提携大学との協力によって行われてきた本学の留学制度の成果を学内外に広く紹介することを目的とした、本学初めての試みでした。

4月19日から27日までは、昨年度新設された国際交流センターにて、カナダ、ロシア、中国、韓国、アメリカの各コースが、それぞれの大学や大学における授業内容、大学が位置する地域や国の文化・歴史・生活習慣を、ポスターや様々なモノの展示を通して紹介しました。参加学生諸君のいきいきとした表情を捉えた写真、色とりどりの衣装や人形、そして手作りの魅力的な図表は、本学学生のみならず、偶然大学を訪れていた高校生にも大変好評でした。また、各コースの展示品の一部は、5月1日から18日まで、古町の新潟中央キャンパス1階にて再び展示されました。

国際交流センターの展示と並行して、4月19日から23日までの昼休みには、学生ホールで各コースのパフォーマンスが行われました。その一部を紹介すると、ロシアコースの市岡教授も参加した民謡の合唱、中国コースの中国語のナレーション付で太極拳の演舞、アメリカコースの留学中の様子を写したスライドショー、韓国コースのチマチヨリの試着、カナダコースの留学中の様子を写したビデオ上映などでした。それぞれの提携先大学のカラーが見えてくる楽しいパフォーマンスとなりました。

留学から帰ってきてしまうと、色々な場面で色々なことを考えさせられたはずの留学中の濃密な体験は、どうしても徐々にその鮮度を失っていきます。パフォーマンスやモノを通じて多くの人々に留学制度を紹介することによって、学生諸君が留学中の体験と向き合い、そこで新たな着想を得る、そしてさらに帰国した留学生達のそのような姿を見て将来の留学生達が留学の魅力を体感する、そんな機会として国際交流フェアを定着させていけたらと考えております。

また、初日のロシア民謡の合唱の様子が、国際交流センターでの各コースでの展示と共に新潟テレビ21で放映されました。今後も、様々な形で、国際大学としての本学の国際交流活動を、地域社会に向けて広報していきたいと思っております。



学生サポートその①：情報センター さらなる学生サポートの充実に向けて

情報センターの教育用コンピュータ設備は、最新のハード、ソフト、ネットワークを整備して、授業時間以外でもいつでも快適に利用できる環境を提供しています。今年の夏休みには、3階教室のパソコンと語学用ＬＬ設備を最新性能のものに入れ替えます。

国際交流センターへ行く通路のオープンスペースに設置したパソコンは、数人のグループで会話しながら利用するなど、高い利用率で活用されていますので、そのスペースにふさわしい愛称をつけようと考えています。募集しますので良い名前を考えてください。

今年の4月から、学内全域に無線LAN設備が設置されました。携帯用ノートパソコンを持っていれば、学生食堂、学生ホール、一般教室など学内のどこからでもネットワークに接続できます。自分のノートパソコンを持っている人は、ぜひ使ってみてください。ただし、利用にあたっては、マルチメディア準備室への登録と、内蔵機種以外では無線LANカードが必要になります。無線LANカードの貸出しも行っていますので相談してください。

近く、パソコン操作に関する学生相談員を置く予定です。操作がわからない場合や、使用中にトラブルが発生した場合など、気軽に相談できるようになると思います。

また、本学ホームページのメニュー「学内サービス」のなかで、情報センター利用に関する有用な情報を提供したり、教材や通信ソフトのダウンロードなどのサービスを行っています。時々アクセスしてみてください。

竹並 輝之 (情報センター長・情報システム学科 教授)

学生サポートその②：図書館

― 千客万来を目指して ―

昨年度は、本学開学十周年記念事業として図書館の増築を行い、施設的には一定の充実を図ることができました。一例として、新たにグループ学習室で友人達と話をしながら勉強ができますし、館内貸出しパソコンで、ゼミのレジ

ュメを図書館の本を見ながら作成できます。

当然のことですが、図書館は大学の知的活動の中心に位置しています。とくに、本学の図書館は、「学習図書館」的機能を重視しており、今後は、この機能を充実させるために、学生や教員にとってできるだけ使いやすい図書館にすることを目指します。そのために、現在、他大学図書館の視察をしながら、利用者サイドに立って思いきった発想の転換を図りつつ、図書館担当の教員と職員が一体となって改革案を作成中です。そこでの指針は個人的な見解ですが、差当たり以下のごことが考えられます。

第一に、気軽に足を運べるように物理的・精神的バリアの排除が必要となります。本来ならば、大学の一番便利な所に配置されるべき図書館ですが、少々アプローチしづらい所にありますので、入館に際して、物理的・精神的バリアをできるだけ排除したいと考えます。第二に、様々なサービスを提供して、さらに学生にとって魅力ある知的空間にしたいと考えます。授業の課題や準備以外の知的欲求にも応えるような場にする必要があるでしょう。第三に、教育と関連させて学生の図書館利用を高めてもらうために、学部、学科と密接な協力体制を確立させたいと考えます。図書館は教育の現場と不可分であるという認識の下に、教員や教育と有機的に連動することによって、はじめて学習図書館としての機能を充実することができるとはならないかと思っています。

高橋 正樹 (図書セクター長・情報文化学科 助教授)

学生サポートその③：就職支援の強化

キャリア開発サポート

本学では入学したすべての学生が充実した大学生活を送り、自分の目指す進路に進めるように、キャリア開発に必要な就職ガイダンス、自己啓発、および就業体験などさまざまな支援プログラムを提供しています。その中心は3～4年生対象の就職支援プログラムです。これは就職ガイダンスや適性検査、模擬試験、個人面談、合同企業説明会、業界研究セミナーなど実践的な就職活動の支援を行うものです。これを企業求人情報データベースや学生たちの携帯電話や自宅PCに直接Eメールで就職情報を届ける情報システムが補完しています。自己啓発関係では、正規科目と

しての海外派遣留学があり、業種知識セミナー、簿記や公務員試験対策講座などがあります。また、外国語、簿記、IT関連など資格取得を奨励し、海外派遣留学とともに取得した資格に対して一定の奨学金を支給しています。就業体験としては、正規科目として情報システム学科の学外実習があり、情報文化学科も昨年度からインターンシップの試行を始め来年度からは正規科目として導入する予定です。

これらの支援にも拘わらず学生たちの多くはキャリアや職業についてよく考えずに、必要な準備をしないまま就職活動に入ってしまうのが実態です。そのため本学では現在キャリア開発を目的としたカリキュラム開発と既存の支援プログラムの見直しを行い全学的なキャリア開発システムとして体系化することを検討しています。

大竹 康夫 (就職指導委員長・情報システム学科 教授)

第9回フィリピン研究会全国フォーラム

長坂 格 (情報文化学科 講師)

7月10日と11日に、新潟中央キャンパスなどで、「フィリピン研究会全国フォーラム」が開催されました。全国フォーラムは日本におけるフィリピン研究者の研究発表の場として毎年開催されています。本学が開催校となった今年は、過去9年間の中で最多の50名が参加するなど、大変盛況でした。特に、国際協力機構及び本学のご支援により、フィリピン大学の教員が、フィリピンからテレビ会議システムで研究発表を行うという全国フォーラム初の試みも行

うことができたことは、本学の一人として誠に喜ばしく思っております。



フィリピンと接続してのテレビ会議

講義紹介

地域研究特論

情報文化学科 教授 原口 武彦

実は、この科目は過去二年間、佐々木寛先生が試行されてきたもので、わたくしが担当するのは本年度が初めてで最後である。

受講者たちの主体的問題関心を尊重して授業を受講者たちの自主的運営に委ねるといふこの授業特有の実験的方式をわたくしも踏襲したいと考えている。とはいえ大枠としてこの講義名に冠されている地域研究とは何かということについて、ある程度の共通理解は必要だろう。

地域研究とは、たとえばいえば、ライト、9番打者でやっと試合に出してもらったわが子だけを熱心に見つめて応援する母親のまなざしを獲得しようとするものであると、わたくしは考えている。そのまなざしだけが、たとえばお偉い監督さんの大所高所からの大局的な見方では見逃がされがちな何かを発見できると期待してのこっている。

この科目は三年次配当であるから、受講生のみならず、ロシア、韓国、中国、アメリカのいずれかの地域を選択し、その言語を中心に地域研究をすでに一年半行ってきた経験をもっている。その経験は、各自の物の見方に何がしかの「かたより」を生み出しているはずである。ウオッカを飲み交わすロシア人の友人を持った人と、韓国人の友人と焼肉やキムチをつつきあった人とは、やはり世界の見え方がちがってくるはずだ。その違いを相互に見出し、確認し、そのことを通じてより高次の普遍性の獲得を相互に目指す。そんなこと実際にできるのだろうか。やってみよう。

「情報システム特論」

情報システム学科 教授 大竹 康夫

近年の情報技術（ＩＴ）の発展は目覚しく、特にパソコンの普及とインターネットの発展は個人の創造活動や企業の業務の仕方だけでなく全世界的な社会経済の仕組みをも変革させています。そのような状況の中で他の先進国と同様に、わが国も「e-Japan戦略」を策定しＩＴによる国の競争力を高める努力をしています。そこでこの科目では、産業界でＩＴ関連事業やＩＴ化政策立案の最前線で活躍しているキーパーソンを講師に招き、その講師が関与されている事例をベースに産業界における最新のＩＴ化の動向と課題を次の５つのテーマ領域について学びます。①中央・地方政府におけるＩＴ政策と課題、②ＩＴの最新動向とメーカ側の事業戦略、③ＩＴサービス産業の動向と課題、④産業のＩＴ化、ＩＴビジネス、地域活性化などＩＴ活用の動向と課題（Ｃｕｒｒｅｎｔ）。

この科目の特徴の第一は、履修生が数名ずつのプロジェクトチームに分かれ、講義トピックに関連するテーマを調査し成果を発表しあうことです。これにより講義テーマに関する理解を深めるとともに授業への参加度を高めることを狙っています。第二はこのような参加型授業が円滑に進行するように専用のWEBサイトを利用して課題の出題と予習・受講レポート提出、チーム活動情報共有などを行うほか、収録した講義ビデオを学内LANのパソコンで視聴し復習できるようにしていることだ。

◎教員の活動

二〇〇四年一月一日から六月三十日までの教員の研究活動で、ご本人から提示があったものです。

1. 学術論文・図書

- ◎安藤潤（情報文化学科 助教授）
「本国における防衛部門経済」／クロ経済成長——Mueller and Atesogluモデルの実証分析とその評価」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』第七号、五七—七六頁。
- ◎區建英（情報文化学科 教授）
「般復の初期における伝統批判と改革思想」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』第七号、七七一—〇三頁。
- ◎小澤治子（情報文化学科 助教授）
「ロシアの対外交——領土交渉を中心に——横手慎二編『現代東アジアと日本五東アジアとロシア』慶應義塾大学出版会（全一八二頁）所収、一三—一五四頁。
- ◎河原和好（情報文化学科 講師）
共著「資格取得教育に関する教材及び教授法について」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』第七号、〇五一—一八頁。
- ◎岸野清孝（情報文化学科 教授）
学位論文「ITの活用によるトピック輸送の高度情報化に関する研究」京都大学、論士博三七九〇号、全二二七頁、二〇〇四年三月三日。
- ◎熊谷卓（情報文化学科 助教授）
判例紹介「プロテストと人身保護請求の可否——クアタナエの被拘束者に関する五つの裁判例から」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』第七号、一九—一九九頁。
- ◎小宮山智志（情報文化学科 助教授）
「階層線形モデルによる、地域不公平感の分析」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』第七号、一六一—一七八頁。
- ◎佐々木桐子（情報文化学科 講師）
共著「資格取得教育に関する教材及び教授法について」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』第七号、〇五一—一八頁。
- ◎澤口晋一（情報文化学科 助教授）
共著「Present-day peripheral environments in central Spitsbergen, Svalbard. Geographical Review of Japan Vol.77, No.5, pp.276-300.
- ◎申銀珠（情報文化学科 助教授）
「ソウルの異邦人、その周辺——李良枝（田熙）をめぐって」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』第七号、一一—一五頁。
- ◎高橋正樹（情報文化学科 助教授）
「九〇年代のタイ・クロバーレーンとタイ政治の変動」『アジア文化研究所年報——東洋大学アジア文化研究所六九—七八頁。
- ◎長坂格（情報文化学科 講師）
Festivity, Overseas Migration, and Local Politics: Transformation of the Town Festas in Iloos, Philippines. In Ton Gode ed., Post Colonialism and Local Politics in Southeast Asia, New Day Publishers, pp.217-244.
- 1 Community-Based Organization in the Philippines. In Minoru Nakata ed., Building Local Democracy: A sociological Study of Community-Based Organization among Eleven Countries, 西治体研究社, pp.113-128.
- 「町工場と親族ネットワーク」西村知川田牧人編「制度を生きた人々——フィリピン地域社会経済の学際的研究」鹿兒島大学多島島研究センター（南太平洋地域調査研究報告N.040）、六五—九二頁。
- ◎広瀬真三（情報文化学科 教授）
「李鴻章の政治活動と朝鮮史研究」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』第七号、三三—五五頁。
- ◎藤瀬武彦（情報文化学科 教授）
共著「新潟国際情報大学学生の形態・体力及び運動能力——体格指数、皮下脂肪厚、及びバーバル筆上能力等について」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』第七号、二二—三六頁。
- ◎フライング・アレックス（情報文化学科 教授）
ロシア語訳 Masao Ichioke, Regionalnaya diplomatiya v Yaponii, Dai-naka, p.300（原著：市岡政夫「自治体外交新潟の実践：友好から協力へ」日本経済評論社）。
- ◎宗澤拓郎（情報文化学科 教授）
「競争優位と研究開発戦略」林昇一、高橋宏幸編著「現代経営戦略の潮流と課題」中央大学経済研究所叢書三七一—四〇四頁。

2. 研究発表

- ◎青淵正幸（情報文化学科 助教授）
「測定された企業価値と株式の流動性——日本経営分析学会第二二回年次大会、流通科学大学、五月。

海外研修記

豪州の月

山口 直人

(情報システム学科 助教授)

「思ひきや深山の奥にすまぬして雲井の月をよそに見むとは」

太陽は東から昇るのでありますが家は北向きに建てていました。ほとんどのビールの栓はスクリーキーヤツで栓抜きが不要で手で開けることができます。に飲めたのでありました。持参しました「T」機器のディスプレイには南緯30度30分30秒という数字が表示される地点、オーストラリア国、コーサスウェールズ州、アーミニール市で見た月は日本で越後で見える月と同じ月なのであります。

シドニーから約550km、プリズベンからもほぼ同じ約500km、大デバイディング山脈の中で標高1000mのところにありますアーミニールという町で一年間暮らして参りました。人口3万人弱の小さな市ですが、そこに「ユースランド」大学という大きな大学があり、その大学の客員教授という事で、海外研修としていろいろの勉強をさせていただきました。そのような機会をいただいたこと、また一年間ご支援をいただいたことに對しまして、心から感謝申し上げます。

夜空を見上げますと、星は手が届きそうに驚きました。あれが南十字星と何回も教えられて星を見上げながらでも月は日本で見ると同じだなあと望郷の念を何度も感じました。月といいますが、豪州のカレンダーには満月、半月、新月のマークが書いてあります。そしていつのまにかその印によって月の形を想像し、方から月の出を心待ちにするようになりました。それは、何日何曜日ということを考える行動ではなく、もうとゆつたりとしたサイクルで暮らすということでした。前時代的とも言うかもしれませんが、現在の日本と違って、本当に時間の流れ方がゆつくりなのであります。住んでいました家の修理を依頼しても約束の日時が守られたことは無く、せつかな日本人としては少々修理するわけでしたが、それでも結果としてはちゃんと修理されて「よかつたじゃない」と言われて収まってしまう、というのが今の日本人としてはなかなか飲み込めないと思われまふ。

しかしながら、電子政府への取り組みという分野では、国連の調査によれば日本の17位に対して豪州は3位ですから、決して時代遅れではなく、先進国なのであります。もちろん、BフレッツだとかADS-Lだとかのブロードバンドネットワークが完備していることは国土の広大さから考えてもありませんから、その順位のつけ方にはわけがありますけれども、インターネットが深山の山里の暮らしている中にも浸透してしまっていることを実感したことで認識が変わったこと、この海外研修の成果だと思っております。

また、同じようなことですが、私の研究テーマを言いますと、「フランス・ス・ロックウェット」といって、地域計画・都市計画の理論と実務に携わって来ましたが、フランスをパイロットにならざるえ、計器飛行と有視界飛行という例えを使って「計器飛行をさらに高度化する」ということを目指して来たわけです。具体的に言いますと、たとえば地理情報システムというような精密な電子の地図を自由自在に使うようなイメージですけれども、豪州で暮らしてつらつらと、そもそもそんな詳細な地図はありませんから、やっぱり考え方が何か違ったのかというところを意識して、そういう「T」によるシステムというものをどう考えなくては行けないかという示唆を感じた、ということでした。

さらに、日本から来た「理系」分野の研究者だということ、これは何か技を持っているんだという期待の眼差しを感じるわけですが、日本の大学と同じかあるいはもっと進んだ情報システムが整備されているのを目の前にしますと、ショックを受けるわけでした。たとえ英語での会話が不自由だとしても、男は黙って勝負するということ、技術等で会話できるような確かな技を持つていことが大切なんだと思うのであります。これからその感覚を形にすることを目指したいと思ひます。

豪州では本当にいろいろな体験をすることができました。豪州の人たちとの心の触れ合いもできました。何でも自分でやってみてその実体験こそが、番の学習と信じて来ましたが、とても素晴らしい年だったと思ひます。お話ししたいことは山ほどあります。お伝えしたいこともたくさんあります。どうぞお気軽にきて下さい。またこれから豪州へ行くことがなとお考えの方で知りたいたいことがありましたら、たぶんお役に立てると思ひますので、どうぞお尋ね下さい。

冒頭の歌は京都大原に隠棲した建礼門院徳子の歌でしたけれども、現在の思ひは、

「夢の世にかつまどろみて夢をまた語るも夢もそれかまにまに」

というものです。夢だったのではないか、夢であるなら覚めないでいまいよう、この歌は良寛さんですけども、あの豪州の暮らしは夢だったのではないかと思ひながら、今でも自動車で少し走ればあの風景の中に居る、そんな錯覚も感じています。既に懐かしいという感情と共にほっとする、そこに居るやうな……。しかしながら、現実には、赤道をはさんで反対側の反対側、飛行機にの時間乗って行かなければ着かないうようなのであります。

◎越智敏夫(情報文化学科 助教授)
「アメリカ政治文化論の統合的機能・同時多発テロ」と市民宗教「第十一回公共哲学研究会」千葉大学、一月。

「Erasings Memories, Preserving Memories: Political Meanings of Antipollution Movements in Cold War Japan」, New York University, The International Center for Advanced Studies, New York University, March.

「Politics and Political Science in Postwar Japan, Japan Studies Association of America, Honolulu Pacific Research Center, May.

◎田井陽一郎(情報文化学科 助教授)

「EUの現況、地方自治の位置づけ」早稲田大学O.E.A.の創生内研究部会、東京アジアにおける越境広域経営研究会、早稲田大学、一月。

「EU Environmental Law and a Post-nationalist Discourse」, Jean Monnet Seminar: EU Policy & Comparative Aspects, the University of Manchester (the UK), February.

◎刈部恒徳(情報文化学科 特任教授)

「Oxford English Dictionaryの歴史をたづね」は、Oxford English Dictionary/Authorized Version (11-1)の英語を翻訳(翻訳)「Oxford English Dictionaryを利用する」(司会、講師)日本英学会第七回全国大会、大阪大学、五月。

◎佐々木桐子(情報文化学科 講師)

「道路交通システムの「ミレニウム」解析——新潟県交通事情をふまえて「オアシス・オートメーション」を駿河台大学、五月。

◎原口武彦(情報文化学科 教授)

「アフリカの部族——終章——」第四〇回アフリカ学会学術大会、中部大学、五月。

◎フランソワ・アレクサンドル(情報文化学科 教授)

「古代から明治時代にかけての日本教育史」極東大学博士論文審査委員会事前審査中の発表(博士論文の概要発表)、一月。

◎宗澤拓郎(情報文化学科 教授)

「XMLを使用した「ナレッジメーカー」の開発」情報通信情報懇話会、新世代情報通信懇話会委託研究報告。

◎矢口裕子(情報文化学科 助教授)

「美しき屍の告白——矢川澄子の死を読む」日本平和学会春期研究大会、北海道東海大学、六月。

3. 一般向け執筆・講演

◎越智敏夫(情報文化学科 助教授)

書評「チャールズ・カフチャ」著「アメリカ力時代の終わり」日本放送出版協会「図書新聞」二六七一号。

◎岸野孝孝(情報文化学科 教授)

講演「電子タグ(エーティック)の技術動向と応用事例」茨城県技術士会第七回定期総会、講演会、茨城県ひたちなか市ホテルクリスタルパレス、六月。

◎藤瀬武彦(情報文化学科 教授)

執筆「読上講座」一般人を対象とした三大基本種目の指導効果と意義について「JAPA時報(日本パワートランニング協会機関誌)第二二二号。

講演「平成十五年健康運動実践指導者養成講習会——実技試験」新潟県健康づくりセンター、一月。

講演「平成十五年健康運動実践指導者認定試験委員会」新潟県庁、一月。

講演「平成十五年健康運動実践指導者認定試験委員会」新潟県立三本木高等学校、同校三月。

講演「日本海を平和の海へ——拉致、北朝鮮を考える県民シンポジウム」コーナイナー、新潟日報社主催、新潟市民芸術文化会館、五月。

◎フランソワ・アレクサンドル(情報文化学科 教授)

講演「口・ア文化、日本文化の共通点」新潟県空港課主催「ロア文化シリーズ」新潟中央公民館、六月。

◎矢口裕子(情報文化学科 助教授)

講演「総黙秘を超えて——アナリス・ニと原真佐子」シエンター視点に立った研究、教育者ネットワーク、新潟市万代市民会館、二月。

4. 特許取得

◎近藤進(情報文化学科 教授)

United State Patent: Semiconductor optical devices and the fabrication method (半導体光デバイス)の製造方法 S. Kondo et al. Patent No.: US 6,717,187 B2. Date of Patent: Apr. 6, 2004.
I United State Patent: Semi-insulating substrate, Semiconductor optical device and fabrication method of semiconductor thin film (半導体絶縁性基板、半導体光デバイスと半導体薄膜の製造方法) Riga et al. Patent No.: US 6,692,837 B2. Date of Patent: Feb. 17, 2004.



こう しょう さい 紅 翔 祭

10月23日(土)・24日(日)

テーマ『一喜一遊』

本年度は10月の23、24日両日に紅翔祭を開催する事になりました。今年はメインテーマを「一喜一遊」とし、本来の一喜一憂とは意味合いの異なったものとなっています。近年の世界情勢は9・11同時多発テロ事件にイラク戦争・人道支援の自衛隊派遣や拉致問題と世界は大きく揺れていますが、こうした世の中で楽しんでいる場合ではないと思われる方もおられるかもしれませんが、こんな世の中だからこそ楽しむこと・笑顔を絶やさないことが重要なのではないかと僕は逆に考えます。それはいずれ世界の笑顔につながるからだと思じているからです。だからこそ今年は一つ一つの今感じることのできる喜びや遊びを大切にしていこうとの考えのもと一喜一遊と造語を作り出したのです。

最近の新潟で発生した集中豪雨による三条・見附・中之島の状況は惨憺たる光景でした。そして、そこで僕は「皆の心からの笑顔が失われている。」と感じとても悲しい思いに襲われました。これを受けて、我々紅翔祭実行委員一同、多くの人々に喜び、楽しんでもらえるよう、又身近なところから少しずつでも笑顔を広げていこうと現在も様々な活動をしています。至らないところも多々ある我々新生学友会ですが、精一杯多くの人を満足させるよう、多くの人に喜ばれるよう全力で取り組んでいきたいと思っております。皆々様の御参加・ご協力を是非ともよろしくお願い致します。

紅翔祭実行委員長 野沢 正

文化講演会



日時 10月24日(日) 開場13:00

開演13:30~15:00

講師 櫻井よし子氏「日本よ、びやかなれ」
場所 本校体育館(新潟市みずき野 3-1-1)

定員 500名先着 無料。

申し込み方法 整理券が必要となりますので、はがきに住所・氏名・年齢・職業・電話番号・希望枚数を明記の上お申込みください。お一人、5名分までお申込みできます。9月13日(月)より受け付けます。
申し込み先 / TEL 095-239-3111 新潟市みずき野3-1-1「新潟国際情報大学」宛
紅翔祭実行委員会 文化講演会「宛問合わせ」/新潟国際情報大学学務課 TEL 095-239-3111

この講演会は、父母会及びみずき会(同窓会)の後援事業です。



スポーツ大会

スポーツ大会実行委員長 永喜多 俊

今年度も5月19日(水)にスポーツ大会が行われました。今年度のスポーツ大会実行委員会が主催した種目は、メイン種目にミニサッカー、ソフトバレーボール、大縄跳び。サブ種目に当日エンタリーのフリースローを開催しました。

今年度は、スポーツ大会実行委員の人数不足により、昨年度あったサブ種目のストラックアウトがなくなり、楽しみにしていた学生の皆さんには大変ご迷惑をおかけしました。すみません。

今年度は参加申し込みの日程が短かったのですが、学生の皆さんの多数の参加のおかげで、例年通りの盛り上がりを見せました。生憎、天気は晴らず、屋外種目も屋内種目も双方ともに中止になることもなく、また大きな怪我もおきず、スケジュールも当初の予定どおり円滑に進み、最後の教員対学生との試合も良い盛り上がりを見せました。

今振り返ると、反省すべき点も多々あります。「昨年度以上の盛り上がり」を目指して努力したのですが、空回りしたところが多かったと思います。結果的には「スポーツ大会をやった」だけで終わった気はしますが、それでも、教職員や学生から賛美の言葉をもらうこともあり、ただただ恐縮してしまいます。

準備段階から協力してくれたスポーツ大会実行委員、色々とご支援ご指導してくれた教職員の方々、最後にスポーツ大会を一緒に盛り上げてくれた皆様方、この場を借りて御礼を申し上げます。本当にありがとうございます。本当にありがとうございました。



OPEN CAMPUS 新潟国際情報大学オープンキャンパス

平成16年 第2回 10月2日(土) 10:00~15:30

CONTENTS

- 学科及びカリキュラムの説明
- 入試個別相談
- 入試情報説明
- 海外留学相談
- 入試問題の傾向と対策
- 就職相談
- 模擬講義
- 在学生との懇談
- コンピュータ実習
- 学内見学

※昼食は学生食堂にて無料提供します。ぜひご試食ください!



参加お申し込み

高校の進路指導の先生、
もしくは右記にお申込みください。

新潟国際情報大学 学務課

〒950-2292 新潟市みすき野3-1-1
TEL.025-239-3111 FAX.025-239-3690
E-mail gakumu@nuis.ac.jp

平成17年度 入学者選抜試験日程 ①詳細は募集要項でご確認下さい。

入試区分		募集人員		出願期間	試験日	試験実施教科・科目
推薦入試	高校長推薦 指定校制	情報文化学科 10 情報システム学科 20	30	16.11.1(月)~ 11.9(火)	16.11.14(日)	面接・小論文
	高校長推薦 公募制	情報文化学科 30 情報システム学科 35	65			面接・小論文・基礎体力テスト 種目は募集要項で確認ください。
	高校長推薦 スポーツ	情報文化学科 情報システム学科	若干名			面接・小論文
社会人入試		情報文化学科 情報システム学科	若干名			
一般入試	前期	情報文化学科 35	95	17.1.6(木)~1.21(金)	17.2.2(水)	・国語：国語Ⅰ・国語Ⅱ (いずれも古文・漢文を除く) ・数学：数学Ⅰ・数学Ⅱ (数学Ⅱは、微分・積分を除く) ・外国語：英語Ⅰ・英語Ⅱ 上記3教科の中から2教科を試験会場で選択
		情報システム学科 60				
	大学入試センター試験	情報文化学科 15	35	17.2.1(火)~2.15(火)	17.1.15~16の 大学入試センター 試験を受験していること	学科試験を課さず、17年度のセンター試験の成績で判定。全教科の中から2教科2科目選択。配点：各教科100点。3科目以上受験した場合は高得点の2教科2科目を合否判定に使用
		情報システム学科 20				
	後期	情報文化学科 10	25	17.2.17(木)~3.2(水)	17.3.8(火)	・国語：国語Ⅰ・国語Ⅱ (いずれも古文・漢文を除く) ・数学：数学Ⅰ・数学Ⅱ (数学Ⅱは、微分・積分を除く) ・外国語：英語Ⅰ・英語Ⅱ 上記3教科の中から2教科を試験会場で選択
		情報システム学科 15				

※平成17年度入学の学生納付金のうち入学金が従前の半額(100,000円)となります。

●入試に関する問い合わせ先

新潟国際情報大学学務課教務係 〒950-2292 新潟市みすき野3丁目1番1号 電話(025)239-3111 FAX(025)239-3690

「エコからはじめよう、新潟からつながろう!」をスローガンにした「2004 夏のクリーン&じゅうじゅう祭りインにいがた」は私たちIVICが新潟大学、新潟県立女子短期大学の環境、国際協力サークルらと合同主催し、企画発案した初めての多大学間サークル協同イベントであった。今回のイベントは海岸清掃をツールに、ジャンル・世代を超えた団体間のネットワーク強化を試みたものであったが、限られた時間のなかでそれぞれ土壌の違う団体同士が集まったこともあり、開催までの過程は想像以上にハードなものだった。しかしそんな学生たちの未熟なイベントは想像以上の地域からの下支えという嬉しい予想外によって達成することができた。

6月27日の三浜同時海岸清掃、7月4日の小針浜集結海岸清掃・交流イベントは単に環境保護に留まらない「ジャンルを超えた場づくり」が期待されていた。大学、地域、市民団体などが個人の持つ個性や属性を壊すことなく、そこから一歩進んで互いの距離感を縮めることが環境に限らずあらゆる社会問題における1つの解決策だということとは日々感じていたことだった。

そんな意味で今回のイベントが単なる多大学間交流会になってしまった感否めない。しかしその試みは少なくとも地域との連携、大学間の距離縮小にいくらか貢献をしたことは確かである。今回のイベントで頂いたたくさんの方々の協力を無駄にしないためにも、今後も更なる大学内外の活動展開によってジャンルを超えた広い「つながり」の重要性を積極的に発信していきたい。



「エコからはじめよう、新潟からつながろう!」

情報文化学科 新潟 厚子

卒業生の便り

経験を積むつて楽しい！

渡邊 陽子

（情報システム学科 一九九九年三月卒）

私の入社したBSNアイネットは、情報処理サービスでは新潟県においてリーディングカンパニーであり、地方自治体や医療機関、民間会社へ県内外問わずサービスを提供しています。今までに携わった仕事は、地方自治体が住民に対してサービスを提供するシステムのSEです。失敗したら新聞に載ってしまうほどの社会的責務の大きい仕事です。常に緊張感を持って取組んでいました。学生から社会に入り、いきなりこのギャップに驚いたことを覚えています。ここではホスト・コンピューターという大型コンピューターから分散型のクライアント・サーバーシステム、そして今や主流となったWebアプリケーションの開発と、様々な経験をしました。でも一番大変なのは、SEという仕事柄、「顧客が何を望んでいるか」に合わせてシステムを構築することでした。ただ表面的に要求に合わせたシステムを構築すると、顧客の使用目的にミスマッチであったり、使いにくかったりと色々な失敗をしました。そんな経験をもとに、顧客要求の本質を見極める目が養われたような気がします。

現在は、大規模なアプリケーションパッケージを販売促進する部署に配属され、大手メーカーや同業他社、またはエンドユーザー向けにプレゼンテーションやデモンストレーションを行っています。全国展開で、やりがいのある仕事です。顧客が常に異なり、また制限時間等もあき、とおり「一辺倒の説明では、せつかくの良いシステムでも他社に負けてしまう場合があります。SEで学んだ「顧客が何を望んでいるか」を見抜く訓練がここで活かされて、毎回違うシチュエーションでありながらも、顧客のニーズに合わせてなんとかこなしています。

本当にやりたい仕事に就職できれば最高ですが、自らの経験が自信になり、それがやりがいにつながっていく仕事も楽しいものです。在学生の皆さんは、これから自分で将来を切り開いていくことが出来るのですからうらまやしいです。楽しめるように頑張ってください。



オープンカレッジ開講記念講演会開催

本学エクステンションセンターでは、今年度よりオープンカレッジ（公開講座）を実施しています。前期はすでに20講座を開講しており、それぞれの講座に在生学生はもとより、卒業生や在学生のご父母の皆様を含め一般の方々からも定員数を上回る応募が寄せられており、好評を得ております。

オープンカレッジの実施にあたり、去る7月24日、講師に波多野敬雄氏をお招きして、開講記念講演会「日本の常識、世界の非常識」を開催いたしました。

波多野氏は、国連大使や国連安全保障理事会の議長を務めた経歴をお持ちで、現在は学習院女子大学長を務めておられます。

「現在、世界中でグローバル化（世界の一体化が進んでいます）が、日本ほど世界に関心の低い国はない」と言われています。全国紙の新聞の二面で扱う国際問題といえは、イラク自衛隊派遣や北朝鮮鮮拉致問題など、日本に関係ある記事ばかり。

から。パレスチナ問題やユーゴスラビア民族問題などは掲載されません。日本人はもと国際問題に興味を持ち、国際性を身につけるべきです。

そのためには、次の3点が重要です。一つは、「メディアで国際問題を取り上げること」。二つめは、「日本人は諸外国への意見、主張を述べるべきこと」。三つめは、「子どもたちから自分の意見を持つように、小・中学校で指導すること」です」と述べられました。

講演は大変興味深く、聴講された皆さんにとっても、充実した実り多き講演会となりました。



「石川真澄さんを送る」

情報文化学部長 市岡 政夫

石川真澄さんが逝った。7月16日。享年71歳。あまりにも早かった。石川さんは、先ごろ刊行された本学の「10年史」に見るように、初代内山学長、初代浦学部長と「三銃士、三人組の心意気」で本学の基本構想を練った1人である。当時石川さんは、『朝日新聞』の政治記者として勇名を馳せ、広くその名を知られていた。石川さんの真骨頂は、選挙結果の分析方法や、小選挙区制導入に対する論陣に顕れていたと言われている。機械工学出身の石川さんは、ジャーナリストとしても、政治学者としても高い評価を得ていた。その業績は数多くの著作として残っている。本学着任は開学後2年を経た1996年だった。以降2000年まで、教員として教育・研究に携わる傍ら、98年からは1期2年学部長も務めた。石川さんの功績は本学の歴史に大きく刻まれるだろう。

この間、石川さんは実に幅広い新潟の人々の交わりを大切にしてきた。「新潟は、俺の趣味のバードウォッチングには最適なんだよ。酒もよし、料理も美味しい。」今も耳に残る石川さんがよく口にしていたセリふだ。しかし、石川さんが心行くまでバードウォッチングを楽しんだことはなかったかもしれない。確かに忙しかった。

石川さんが桜美林大学に移つてまもなく病を得たことを聞いていた。案じていた。が、ついに逝ってしまった。淋しい。石川さんの遺志にも添うべく、本学発展のため今後とも懸命な努力を重ねていくつもりだ。

万感の思いを込めて、「石川さん、ありがとうーそして、さようなら。」合掌。



湧 YUUGEN 源

編集後記に代えて

広報委員長 永井 武

平成16年7月13日の集中豪雨による被害を受けた皆様には、心からお見舞い申し上げます。

本学でも1000名程の学生が被災地より通学しております。完全な復旧を遂げるには、まだまだ時間がかかるでしょうが、被災した学生の抱える悩みや相談に私たち教職員が親身になって応じ、彼らの心のケアに努めたいと思います。

さて、広報委員長を拝命してから四カ月が経過しようとしています。その間、この「国際・情報」の編集・発行作業、2006年度大学案内の準備、進路ガイダンスの企画・開催、オープンキャンパス、NUISILIVEの企画・開催、高校進路指導の先生方への大学説明会開催、大学ウェブサイトの改版、高校生への大学説明などを行いながら、押し寄せつつある少子化の波に本学はどう対処すべきかを考えてきました。

今後の取り組みの一つとして、学生が在学中に身につけた知識や技術を社会に出ても活用し、卒業後さらに大きく成長できるように、実践的な講義を数多く取り入れたカリキュラムの改定を予定しています。

「十年一昔」と言いますが、本学が開学して十周年を迎えました。社会の要求は開学当初と比べて、複雑に細分化されています。そうしたさまざまな要求にこたえるべく、本学も変化していく所存でございます。

最後に、先日お亡くなりになりました石川真澄さんのご生前のご功績を偲び、心からご冥福をお祈り申し上げます。